

東京都多摩市の伝統的民家の復原研究

—旧石阪好文家住宅の事例分析—

K99021 岡崎正人



1-1 研究目的

古民家を個人で保存していくのは容易ではない。公共団体が引き取って保存や移築をするか、もしくは残念なことに解体せざるを得ない。今回の調査対象となっている多摩市の石阪家も、平成15年1月16日から解体され始めた。石阪家は、屋敷取りを含め、多摩の原風景を留める、現存する希少な民家であるため、解体以前に記録保存する方針が多摩市教育委員会により決定された。

本研究ではこの方針に従い、現状の実測調査及び増改築の痕跡を基に、3次元CADを用いて当初の姿に復原し、現状のデータと共に記録保存を行うことを目的とする。

1-2 研究方法

- ① 石阪氏及び多摩市教育委員会に協力をいただき、実測調査を実施。これにより、平成14年時点での建築状況を把握する。
- ② 増改築の痕跡や当時の写真、石阪氏への聞き取り調査等から、中古及び当初の復原を行う。
- ③ ②による増改築の変容の過程を明らかにし、データによる保存を行う。

また上記に加え、昭和54年度多摩市による「多摩市文化財資料 民家編」に記載された伝統的住居の現状を追跡調査する。

1-3 既存調査

過去に、多摩市内全域に点在する古民家の調査が、工学院大学建築史研究室により行われており、石阪家も第1次・第2次調査の対象となっていた。以下にその概要を記す。

① 第1次調査 (昭和50年度)

草葺屋根の民家 63軒

→所在調査、写真撮影、略図等の基礎調査

② 第2次調査 (昭和52年度)

第1次調査のうち、建築年代の比較的古いもの、様式の特徴や意匠的に秀れたもの 25軒

→現状図面 (平面図・断面図・構造図・痕跡図等) の作製、詳細写真撮影、建築年代の推定、建築当初の間取り復原等

③ 第3次調査 (平成8年度、10年度)

第2次調査のうち、市の教育委員会が選定したもの 3軒で、石阪家は対象にはならなかった。

2-1 対象民家の概要

調査対象とした民家の概要は、以下の通りである。

- ・ 所在：東京都多摩市和田 674 番地
- ・ 名称：旧石阪好文家主屋
- ・ 現所有者：石阪勝全氏
- ・ 建設年代：弘化3年 (1846) ※聞き取りによる
- ・ 規模：現状＝約10間×約4.5間 (約150㎡)
復原主屋＝7.5間×4間 (約100㎡)



<写真1> 正面 (H. 14)



<写真2> 正面 (S. 33)

2-2 多摩市の歴史

現在の多摩ニュータウンの入居が始まる昭和46年まで、多摩市の前身である多摩町は農村の面影を残す人口3万人あまりの静かな田園地帯だった。しかし戦後、首都圏中心部への人口集中と深刻な住宅難に加えて、戦前から鉄道で結ばれていたという好条件も重なり、現在の京王線の聖蹟桜ヶ丘駅周辺地域を中心に、都心への通勤者の居住地として多摩町が注目されるようになった。

その後、市制が施行された昭和46年以降、市の南部地域を中心に多摩ニュータウンが形成され、全国から集まった多くの人々が、様々な価値観を共有しながら「新しいまち」づくりを進めてきた。しかしこうして急速に進んだ都市化に伴い、自然や貴重な歴史的文化的文化財などが徐々に失われていくのも事実である。

3-1 石阪家の立地と建築構成

屋敷地は、道路から20mほど入った平坦地にあつて、周囲はほとんど畑地である。西側を高木が囲み、北側を防風林で覆った構えで、南側に開けている。屋敷地の北側はハケ下の高さに道が通り、当屋敷へはこの道から緩やかな坂道を上って入ることになる。また、東側にもう1つ進入路が設けられている。

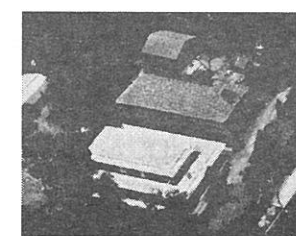
主な建物は、現在居住されている主屋と、そのすぐ裏手にある旧主屋 (蚕室)、その西側にある農機具を入れた倉庫、裏の倉と物置、東側にある外便所と倉庫である。

また、墓地は屋敷地西端の雑木林の中に、稲荷を祀る屋敷神は東南隅にそれぞれ位置する。この屋敷神を祀れたのは、開拓者に限られたという説もあるが、定かではない。その他、物置前面の畑の中には鶏小屋が、物置と倉の間には井戸がある。

そして、これらの建物や畑の間には、ほぼ全面に植樹されている。その中には、保存樹木に指定されているものもある。



<図1> 配置図



<写真3> 屋敷取り (S. 43)

3-2 室内構成

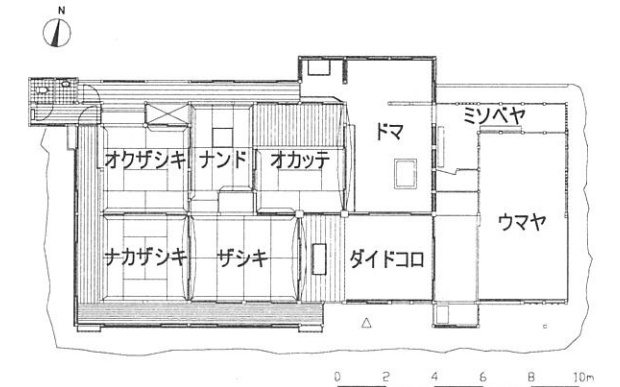
間取りは四間取型の変形をとる。現状平面図を図2に、痕跡図を図3に、復原図を図4にそれぞれ示す。

ダイドコロに接した厩 (ウマヤ) は、後世の建増しと考えられる。ダイドコロに張り出した板間や間仕切りは、復原すると取り除かれる。

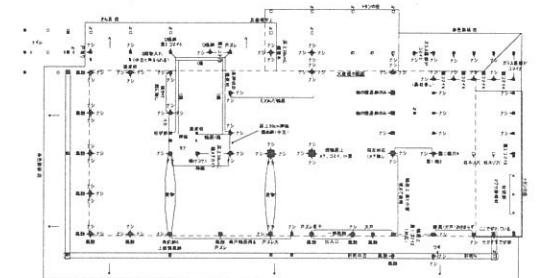
土間・床上境には大黒柱がたち、オカッテ北東隅の柱

は切断されて差物に替えられたと推察される。

ザシキ・ナンド境には、痕跡によって押板が復される。この押板は、古い形式の柱間装置としてだけではなく、おそらく江戸時代後期に上層民家の部屋飾りとして用いられ、階層にも係りあいをもっているとも考えられる。



<図2> 現状平面図



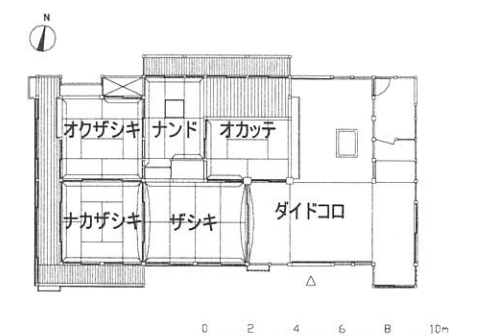
<図3> 痕跡図



<写真4> 押板の痕跡



<写真5> 貫の痕跡



<図4> 復原図

3-3 空間構成

図5、図6に示すように、構造は、梁材に替えて差物を用いて身舎を高く上げ、中2階をとった架構法で、養蚕農家としての建方である。これは、幕末から明治にかけて、農家の副業として養蚕が盛んになり、その影響が建築に繁栄した結果と考えられる。上屋梁と下の梁との間を4尺〜6.5尺位の高低差に保ち、下の梁には天井板を張って中2階を設けた。

屋根は、茅葺・入母屋造りで、現在はトタン屋根とし、南・西側にセガイを廻す。内部は、柱と桁や梁で組み立てられた軸組に、上部を三角形に組んだ椀首で構成されている構法の椀首構造である。そして、その椀首を支える小屋梁は、屋根の荷重を側柱に移す構法である下屋構造をとる。

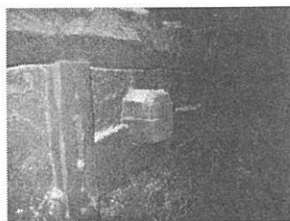
また、多摩市近辺の古民家では1間ごとに柱をたてるが、18世紀中頃になると、中間柱を抜いて1.5間以上の開口部に差物が用いられるようになる。石坂家でもザシキの東西境において差物が使用されているが、ナカザシキ・ザシキ前面には1間ごとに柱が立ち、古式を残す。

ザシキ上部では、柱間に梁をわたして柱上に架らない梁行梁尻を受ける、枕梁という構法を用いている（写真7）。

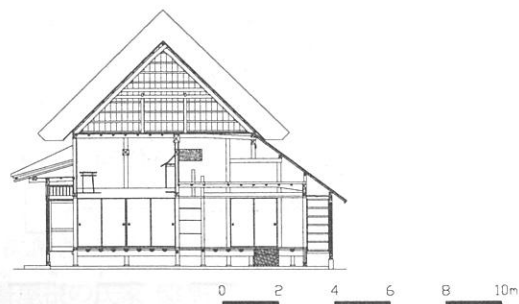
この様に石坂家住宅は、柱の省略程度、差物の使用、大黒柱の仕上げや架構法からも、19世紀中頃（1846年）に建てられたものとして妥当であることがわかる。



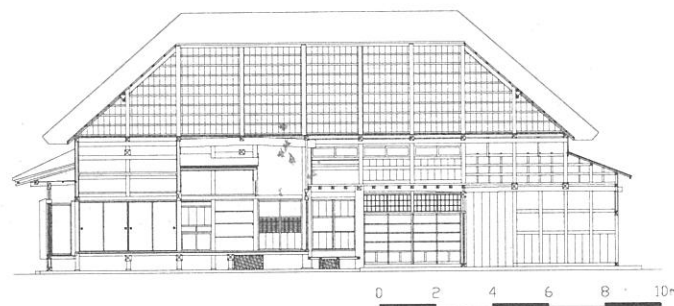
＜写真6＞ 中2階



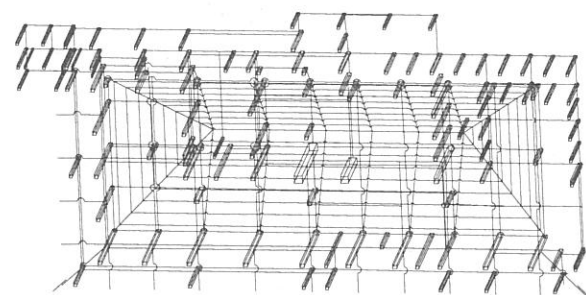
＜写真7＞ 枕梁



＜図5＞ 梁行断面図



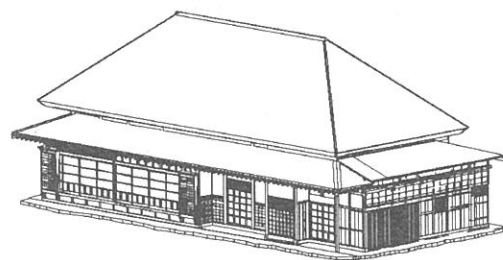
＜図6＞ 桁行断面図



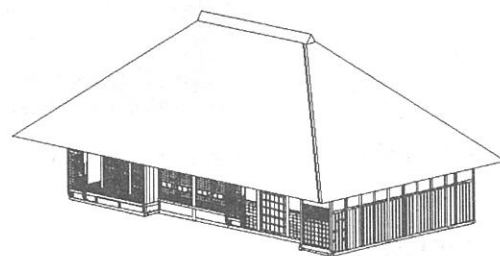
＜図7＞ 架構図

3-4 3次元CADを用いた復原

以下の図は、CADによる現状と当初の姿である。



＜図8＞ 現状の外観



＜図9＞ 建設当初の外観

4 多摩市内に建設された古民家の現状

本研究の調査対象となっている石坂家に、昭和52年度に行われた第2次調査の対象となった24軒を加えた、計25軒の民家の現状及び経緯を、概要と共に表1に示す。

＜表1＞ 各家の概要及び現状・経緯

氏名	建設年代	桁行×梁行(間)	間取り	現状・経緯
峰岸正次	幕末期	8.5×3.5	整形四間取型	取り壊し
川井孝	嘉永2年(1849)	8.5×4.0	整形四間取型	一部改築、屋根トタン葺 現在居住中
小泉一枝	幕末以前	7.0×3.5	整形四間取型	移築保存対象民家として解体 現在、部材は保存されているが、 移築計画は中断
小泉圭助	17世紀末〜18世紀初	7.0×3.0	広間三間取型	取り壊し
小林正治	18世紀末	7.0×4.0	広間三間取型	取り壊し
黒田福一	※不明	5.5×2.5	※住居ではない	取り壊し
加藤勇之助	18世紀前半	6.5×3.0	広間三間取型	取り壊し
加藤雄一郎	18世紀後半	8.0×3.5	広間三間取型	一本杉公園に移築(S62) 展示、体験民家として活用
有山貞一郎	18世紀前半	7.5×4.0	広間三間取型	取り壊し
小磯光治	18世紀中頃	7.0×3.5	広間三間取型	取り壊し
有山清	明治3年(1870)	10.0×4.5	整形四間取型	取り壊し
新倉忠治	※1840年頃の土蔵有り	7.5×4.0	古広間型	取り壊し
有山力男	19世紀前半	7.0×3.5	整形四間取型	取り壊し
有山茂章	18世紀前半	6.5×3.0	広間三間取型	一本杉公園に移築(S62) ＜市指定有形文化財＞
佐伯英一	※不明	6.0×3.0	整形四間取型	取り壊し
伊野英三	19世紀前半	8.5×5.0	喰違四間取型	取り壊し
嵯峨山隆善	19世紀中頃	10.5×4.5	六間取型	一部改築、屋根トタン葺 現在居住中
相沢文雄	※先祖は9代前	7.5×4.5	喰違四間取型	取り壊し
相沢行雄	18世紀末〜19世紀初	7.5×3.5	整形四間取型	取り壊し
小形道夫	18世紀末〜19世紀初	7.5×4.0	整形四間取型	取り壊し
小形武威	18世紀後半	7.5×4.0	整形四間取型	取り壊し
小形稔	18世紀後半	8.5×4.0	整形四間取型	取り壊し
富澤政鑑	18世紀中頃	9.5×5.0	六間取型	多摩中央公園に移築(H5) 一部を団体使用に有料で貸し出し
石坂好文	弘化3年(1846)	7.5×4.0	四間取型の変形	調査中→取り壊し ※本研究の対象民家
石坂康男	明治11年(1878)	7.0×4.0	整形四間取型	取り壊し

上記25軒の民家の現状を、分類ごとにまとめる。

- ・ 現在居住中…2軒
- ・ 保存（未使用）…1軒
- ・ 移築活用…3軒（内1軒は市指定有形文化財）
- ・ 取り壊し…19軒（石坂家が19軒目）

5 解体までの経緯

石坂家には、解体される前に「寺院の附属建築（集会場等）に移築」「部材の転用」という2件のリユース計画があった。しかし、前者は「建築規模の不一致」、後者は「手解体の際に発生する予算的な問題」というのが理由で、計画は中止となった。そして結局、今回の様に解体を余儀なくされてしまった。

表1の結果からもわかるように、保存や移築をされる例はごくわずかだというのが実態である。

6 結論

復原研究の結果、わかった特徴をまとめる。

- ① 桁行2.5間分が増築された。
- ② 当初は南と西の底が無い、茅葺屋根であった。
- ③ 一部の柱を省略し、差物に替えている。

本研究をしてきたことで、私自身も石坂家に対して愛着を感じ、解体を惜しく思う。だが、記録保存する事もでき、これが今後の資料等に役立てば幸いである。

〔参考文献〕

- ・ 多摩市教育委員会「和田西遺跡(植生・民族編)」, 2002
- ・ 多摩市教育委員会「多摩市文化財調査資料 民家編」, 1979
- ・ たましん地域文化財団「多摩のあゆみ(多摩の民家)」, 1998
- ・ 文化庁監修「民家のみかた調べかた」第一法規出版, 1967

指導教員名 伊藤洋子 教授